

---

# DELTA STRIP ~ White Ring ~

未元定規

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

DELTA STRIP ｝White Ring

### 【Nコード】

N2990Y

### 【作者名】

未元定規

### 【あらすじ】

『仮面ライダー』。それはこの街を影から守っている正義の味方の総称。この物語は、『仮面ライダー』になる因果を背負った少年の、絶望と希望の物語――この小説は三つの章の一つ目の小説です。後々投稿予定の小説の一・二話を編集した予告も兼ねた短編です。長い内容になっていますが、暇潰し感覚で読んでいただければ。今回はデルタ編で、後々タイガ編とガタック編も投稿予定です。

## （前書き）

主人公

不音龍一

この作品の主人公。無愛想だが根は優しく、素直クールに近い性格。ただし、言動はクーデレ気味。常識人だが、容姿が不良のように見えて怖がられるのが悩み。

他にも登場する人物は居ますが、それは後々の短編で。

世界は無限に広がっているー

そう定義したのは一体誰なのだろうか。それはいわゆる平行世界、パラレルワールドだ。

人は、見た事も無いのに存在するように仮定する。そうして、それが実在する事を証明する為に科学者は奔走するのだ。

そんな常人には理解出来ない話だが、存在しない物を存在する事と仮定するのは意外と身近にもある。

例えば、『都市伝説』。それは何気ない話から、オカルトじみた様々な話が存在する。夏の風物詩である怪談もそれに当てはまるであろう。有名な所で言うとトイレの花子さんなどであろうか。

この街には有名な都市伝説がある。それは、『仮面ライダー』。その顔に浮かべる感情を隠す為仮面をつけ、陰から人を守る為に戦っている。

そんな人物は、本当に存在するのだろうか。まるでお人好しの塊みたいな人物達が。これも付け足された話なのだろうか。それが分かるのは、それを見た人物だけ――

「――音！　おい、不音ってば！」

「――あ？」

自分を呼ぶ声に思考の渦から引き戻される青年、不音龍一。

その目は常に細く、ぶすつとしている顔だけ見ると紛れもなく不良その物だろう。現にそこまで彼も素行が良いわけではない。悪い訳でも無いが。

「……ああ、悪い。ちよつと考え事してた。なんだ、雨宮」

先ほどから不音を呼んでいたのはこちらも柄の悪そうな青年、雨宮凍司。

こちらは、喧嘩を売ったら返り打ちに合いそうな雰囲気を漂わせている不音と比べ、路地裏でカツアゲをしていそうな典型的な不良のような雰囲気を漂わせている。

「だーかーらーさー！　ゲーセンに行こうって話だっただろう！？　お前もちゃんと返事してただろうが！　あと何か地の文の俺の説明が微妙に酷い気がする！」

しかし、彼もそこまで悪い人間ではない。素行は悪いが。

良くも悪くも女好きの変態であり、腕っぷしも強い。キャラの濃さも学園のトップクラスに入り、周りからも様々な意味で一目置かれている。

ああ、と不音は数時間前のやり取りを思いだし、その場に居たここに存在しない人物を訪ねる。

「零はどうした？」

「ああ、凍上？ なんでも教師に用事頼まれたらしくってさ。今日は来られないってよ。ツイてねえよな、アイツ。ほんと、ツイてねえよ……」

無意味に右手を構えながら復唱する雨宮を無視し、軽く友人、凍上零の事を思う。

彼は雨宮と不音の不良じみた雰囲気と違い、どこまでも純粹無垢そんな瞳をしている大人しげな青年だ。性格もお人好しであり、女子からの人気も高い。周りからは、どうしてこんな二人とつるんでいるのだろう、と疑問を持たれているだろう。

（否定出来ないのも困り物だな）

自嘲気味に笑うと、雨宮に声を掛ける。

「ま、待たせたなら悪かった。んじゃ、とつとと行くか」

「お」

「おっしやまだまだ来いやー！　無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ア！　粉砕　玉砕　大喝采　フウーハツハツハツ！」

(ウザいな……超ウザい)

熱狂してコマンドを叩いている雨宮を冷めた目で見ながら、手に持っているコーヒーを口に含む。

雨宮がプレイしているアーケードゲームは『A:A』。オルカナムアニメスの略称だ。人気のゲームだが、リリースされてからそれなりに時間が経ったので、料金は50円とお手軽になっている。

「うがぁーっつ!! 負けたぁーっつ!! 武士道とは……死ぬことと見つけたり……」

画面を叩きつけながら立ち上がる雨宮。別の台でガッツポーズをとっているピンク髪の彼女に負けたのであろう。

「お疲れさん。期待なんざしてないがな」

「酷えな……。まあ、いいさ。ところで、不音は何もやらないのか？」

「もうやったさ。その射撃ゲー。全クリしたんで暇だったからお前の見てた」

「早っΣ あれ、クリア難しいのに定評があるんだぞ！？ それを俺が遊んでた時間で終わらせたのか！？」

「ちなみにノーコンティニューだ。ランキングトップだった」

「そりゃトップに入るだろうな……。お前射撃のセンスでもあるんじゃないの？ 狙い撃つぜ！ ってな」

「そこまで良かねえよ」

ベンチでジュース片手に喋る目つきの悪い二人組。はた目から見ると不良が屯ってるように見えなくもない。

「……………はあ」

「なんだよなんだよため息なんかついてよ。この雨宮凍司様が相談に乗ってやるぜ？ 話してみろよ」

「半分は自分の出生と友人関係、半分はお前の顔と性格だよ」

「…………ダチの相談に乗ってやろうとしたら、自分を貶されたでござるの巻」

「そいつは悪かったな。だが俺は謝らん」

「よくもひょうひょうと……。ム力ついた。ちょっとストレス発散にDDRしてくる」

「俺には当たらんのかな……。まあ、せいぜい転けないように気をつけとけ。俺も何か周りでも見て回ってる」

「はいはい。見てろよ、店内最高記録叩き出してやる……」

DDRがある方向に歩いていく雨宮を眺めた後、UFOキャッチャーの辺りを眺める。

（さて、何か良いものはあるかな、と……）

ゲーセンの中を一通り見て回るが、興味を惹く物は特に無い。

(こりゃ来た意味ねえな……。ま、たまには良いか)

雨宮の所に戻ろうと振り返ると、

『空海?』

『もらっておこうか』

(……………)

「もしもし、警察ですか?」

「おい待てそこお! 何普通に通報しようとしてんのや!」

「キモい寄るな近付くな気持ち悪いロリコン野郎死ね逮捕されろ」

「何故にちよつと中学生と話していたくらいで通報しますたされな  
いといかんのだよ……。ロリコンとは違うのだよ（21）コンとは  
！」

「言い訳なら署でしてくれ」

「タイーホされる筋合いはまだ無い……。！今の奴はたまたまDD  
Rしててバトツてただけだ！」

「……しょうが無いな、今回だけは見逃してやる。次は無いと思え」

「俺何も犯罪犯して無いのに……。……そういや、なあ、不音。  
ドッペルゲンガー』について何か知らないか？」

「ドッペルゲンガー？ 自分と同じ姿をしていて、見られたら死ぬって都市伝説のか？」

「そう。それだよ。ちょっと最近調べてさ……。なんでも良い。何か知らないか？」

「んな事突然言われてもな……。……そういや、隣のクラスの女子が見たとか言って騒いでたような……」

「ほ、本当か！？ だ、誰がだ！？」

「誰だっけな……。ああ、そう。名前なんだっけ。あの、隣のクラスのピンク髪のアニメ声の奴。神崎……。じゃなくて、な、な……」

「奈月香央里か！？」

「ああ、そう。そいつ。そういやお前仲良かったっけ。その話は本人に聞いてくれよ。さっきまでそこでお前戦ってたんだしさ」

「な、何っ!？ ……おいおい、彼奴がどうして……? ワームに狙われるような何かを兼ねているのか? まさか、資格者? それならあの腕も分かる……」

雨宮はぶつぶつと呟くと、急に立ち上がり、

「悪い、不音! 今日はお開きだ! 急用が出来た! じゃあな!」

「あ、オイ!」

雨宮はそのまま一方的に言い、駆けだしていった。

(なんなんだ一体……? 自分から誘ってきた癖に……)

疑問に思いつつも、周りが奇異の視線でこちらを見ているのに気

づき恥ずかしくなり、足早に立ち去った。

（ホントにどうしたんだ雨宮の奴……。何があいつをあんなに駆り立てるんだ……。？ 珍しいにも程がある）

いつも馬鹿みたいに騒いでいる友人を思い、疑問に思う。彼はいわゆるオカルトマニアなのだが、あの反応は鬼気迫る物があった。その理由を考えてみるが、全く思いつかない。

そう悩んでいた所に、

ドサッ！

（あん？）

路地裏から一人の男が吹っ飛ばされて来た。意識を失っているのかピクリとも動かない。

「おいおい……。不良にでも絡まれたのか？」

一般人なら警察を呼んで立ち去るなりして、自分も被害を受けないように立ち去るであろう。

しかし、不音龍一はお人好しの部類に入る人間である。そこらの不良なら伸せるくらいの實力もある事から、不用意にも近づいてしまった。

「おい、アンタ、だいじょー」

それから先に言葉は続かなかった。声が出せなかった。

何故なら、

その人間は。

目の前で、

蒼い炎を上げ灰になってしまった。

（な、何が一体どうなってーッ！）

つい反射的に、男が飛び出してきた路地裏を向いてしまおうとした。しかし、脳が全力でその行為を阻止する。

見てはいけない。見てしまっではいけない物がそこにある。だから絶対に振り向くな。

しかし、人間という物は非情である。

こんな状況に立たされても、そちらを向きたいという欲求と、何かがあるのかという好奇心が出る。

そして、振り向いた。

そして、見てしまった。

手に円盤のような物を持った、灰色の化け物を。

「なっ……」

その異形を見て、思わず絶句してしまった。悲鳴を上げようにも声が出ない。

『見たか……』

灰色の異形の影に人間の姿が浮かび上がり、喋る。

（な、なんなんだよアレ……。まさか、人間だったのか……？）

「おいおい……まさか見られたからお前を殺す、みたいなナンセンスな真似しないよな？」

『残念ながら、そういう事だ。……死んでもらおうか』

そう言つと、異形は武器を構えてこちらに歩みよってくる。

（不味っ！？）

そう思うが否や、近くの路地裏に駆け込んで行く。

（ヤバイヤバイヤバイヤバイー！ あんなのにかなう訳がねえー！  
ー！ 逃げないと、……死ぬー！）

曲がる。進む。曲がる。進む。進む。進む。曲がる。曲がる。

繰り返し、どこに向かっているのか分からないままひたすら走る。もうどれくらい来たのか分からない。振り切ったのかも分からない。足はひたすらに動く。

ふと、視界に非常口のマークが入る。慌てて駆け寄り、倒れ込むようにして突っ込んで開ける。

走りすぎた疲労が、広い所に出たせいかどっと出る。

そのまま周りに注意しつつ、体を寝かせるようにして休ませる。無論、寝ないように。

「……………」

いくら体力が回復した所で、目を動かして周りの様子を見る。

そこは時代錯誤な研究所のような所だった。所々にビーカーがあり、中には得体の知れない液体が入っている。機械には『SMART BRAIN』のロゴが入っている。

（スマートブレイン……？）

何処かで聞いた事のある名に眉を顰ませながら、ふらふらと立ち上がる。

壁を支えにしながら奥に歩いて行く。電球は切れかかっており、やや薄暗い。

それでもひたすらに歩いて行くと、前方に壁が見えてくる。

（行き止まりか？）

ここまで来るのに曲がり道は無かった。つまり、仮に奴が追いかけてきていたら逃げ場は無く、一巻の終わりだ。

冷や汗を流しながら壁に近づいていく。しかし、それはよく見ると扉だった。横には認識番号のような物もある。

（こいつは……失敗したら即トラップとか危険なタイプ。間違ったら……死ぬ）

何の番号が悩み、じっと見つめる。すると、ある事に気づく。

（この認証機、『3』以外にしか埃が乗ってない……？）

付いてる事には付いているのだが、他に比べると圧倒的に足りない。まるで、『3』しか使わないかのようだ。

（なら、認証番号は3……？ いや、それだと間違って押すかもしれないからセキュリティにならないだろう。じゃあ何回押すんだ……？ ええい、もう勘だ！）

適当な回数3を押す。そして、目を瞑ると――

ピー

(何のピーだよ……？ セーフ？ アウト？)

薄目を開けると、少しずつ扉が開いていくのが目に入る。

(当たりかよ……)

なんとなく脱力しながら、中に入り、先に進むー

奥の部屋はあまり広くなく、特に目を惹く物は無い。

しかし、部屋の中央に合った物は違った。

「なんだこれ……ベルト？」

部屋の中央には台座があり、その上には他には異質の存在感を放つベルトがあった。

「なんでこんな所に……」

そのベルトはいわゆる一般的なズボンに付けるそれでは無く、上から装着する機械のようだ。白と黒のラインは見えていると頭がくらくらしてくる。

ふらふらと歩いて行き、思わず手を触れてしまう。

すると、

「ぐぐあああああああああああああああああ！  
！……！」

頭に割れるような痛みが走る。思わず地面に手をつき、倒れ込む。

『俺は、仮面ライダーなんだ！ 誰かを見捨てるなんて……出来るかよ！』

『■……？ どうして、お前が……』

『■！ 俺は、お前を否定する！』

『なら、お前は……俺が守ってやる。他の何に代えても、俺がこの手で守ってやるよ』

『俺は戦っ……仮面ライダーとして……デルタとして……  
として！ 変ッ身ッ！』 ■ ■ ■ ■

『俺はまた、「死ぬ」のか……？』

「はっ……！」

どのくらいの時間かは分からないが、いつの間にか気絶してしまっていたようだ。

（今は……夢、だったのか？ それにしては妙にリアルだったー  
ー）

『鬼ごっこはおしまいか？ 途中からかくれんぼだったかな』

「!？」

振り返ると、先ほどのスパイダーオルフェノクが居た。

（しまった、こいつを忘れてーってなんで俺、こいつの名前分かってんだ？）

『まあ、良い。ー死ね』

視線を手元のベルトに向ける。

（くっ！？ やるしか、無いのか？）

今まで見たことも無い物。だが、使い方がー分かる。

「こいつがどんな物かは分からねえ。ただどな、こいつに希望を掛けてやる！ 頼む、力を貸してくれ！ 変身ッ！」

『何ッ……！？』

閃光が晴れると、その姿は変わっていた。

体はベルトと同色の白と黒のラインのスーツ。オレンジ色の複眼は綺麗に合っていた。

（俺は……やっぱりコレを知っている。なんでだ？ 俺は、どこでこれを知った？ ……駄目だ、思い出せない。やっぱりさっきの映像がヒントか……）

『その姿……なるほど、デルタか！ まさかこんな所にライダーシステムのプロトタイプがあるとは、な。ならば、貴様を殺してそれを奪いとしましょう！』

そう言つと、殴り掛かつて来る。

なんとか避けるとすれ違い様に頭部にパンチを一発浴びせてやる。

『ぐっ……！』

「Fire！」

《Burst Mode》

デルタムーバーを接続したデルタフォンに音声入力し、バーストモードにする。

「狙い打つぜ、だっけかなあ！」

《ぐう……！》

兩宮が言っていた台詞を口にし、円盤のような武器を狙い打つ。

「決めてやる……！ C h e c k！」

音声入力をし、ポイント弾を装填する。

そして、目を閉じて意識を集中させる。

『くっ………！ まさか、ここまでとは……。ウオオオオオオオオ！  
！…！』

飛びかかってくるスパイダーオルフェノク。その視線が一瞬横で倒れた缶に向けられる。

（………今だ！）

「……はっ！」

《Exceed Charge》

ポイント弾を放ち、動きを固定させる。

『ぐあ……』

「はあああああ！！！」

そのまま飛び上がり、ドリルのように回転しながらポイント弾を通過する悪魔の鉄槌、『ルシファーズハンマー』を放つ。

スパイダーオルフェノクは赤い炎を吹き上げながら、

『み、見事……』

灰となって崩れさった。

「やったか……」

それを見てから、変身を解こうとする。

が、

「ぐ、がああああああ！！」

例の頭痛が俺を襲う。

（だ、駄目だ、意識が……）

「おい、ホントにここなのか？ 爆発音が聞こえたって通報があった場所」

「ああ。見たところ変な研究所っぽいしどっかの奴が実験でもしたんだろ」

「やれやれ、そんなメンド臭い事をやらされーあれ、何だアレ」

「どうした？」

「いや、そこに白色の何かがー」

「あ？ ホントだ。ロボットか？」

「そんな馬鹿な事がーっておい、そんな簡単に近づくなよ」

「だいじょーぶ、だいじょーぶだって！ ほら、止まってるっぽいし」

『オ……………』

「？ 何だ？」

『I-I j a g e 死 m d 殺 h t n x w 嫌 o u p z s i 仮 l c b e y :  
……………』

「」「う、つわあああ！」「」「」

ゴギィ！ グチャ！

デルタギアの失陥。それは、常人には耐えきれない破壊衝動――

## （後書き）

初めましてだなあ、ガン……ゲフンゲフン。

恐らく初めましての人が多くであろう未元定規です。

執筆していたフォースが凍結したので、そのキャラ達を使って小説を書くと思う、一番書きやすいデルタに。

この物語は、自分の戦う意味を問いながら本能のまま戦っていく、気づかぬまま罪を重ねていく少年の物語。その罪に気づいた時、少年はどうなるか？みたいな流れ。本編を書くときは

共通

←

一章（各二話）

←

二章

←

三章

←

共通

の流れで。それぞれの物語は決して交わらない。しかし、同じく過ごす日常で知らぬ内に少しずつ絡んでいき、やがて大きく歪んでいく――

本編を投稿する際参考にするので、指導お願いします。また、後半のggd加減はそちらで直す予定です。

次回は今回空気がった零主役。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2990y/>

---

DELTA STRIP ~ White Ring ~

2011年11月13日11時19分発行